

宗岡二中だより

11月号



令和5年11月1日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

弱いロボット

～惻隱の心～

校長 伊藤大輔

「むかしむかしね、あるところにね、おじいさんとね、おばあさんがね、すんでいたんだよ。おばあさんがね、かわでね、せんたくをね、しているとね、どんぶらこ、どんぶらこ、おおきな、ええと……あの……なにがながれてきたんだっけ？スイカじゃなくて。ええと……。」

鉄腕アトム、マジンガーZ、ガンダム、ターミネーター……私が子供のころ見たアニメや映画には、こうしたロボットが登場しました。力にあふれ正義を貫き、悪を倒すキャラクターです。人間の力が及ばないことが「できる」強いロボットです。

豊橋技術科学大学の岡田美智男教授は、ロボットに対するこうした先入観に待ったをかけました。自力で課題を解決「できない」ロボットの開発にあえて挑んだのです。「弱いロボット」の開発です。冒頭のやり取りは、トーキングボーンズというロボットによる朗読です。ロボットが言いよどむと子どもたちは身を乗り出し、なんとかロボットの助けになろうとします。他にも、ゴミ箱ロボットは、ゴミが拾えません。腕がないのです。拾う代わりに、ゴミのある場所で、「もこもこ」と意味不明な言葉を発します。ゴミが落ちていることを周囲に知らせるのです。ロボットの言葉が幼い分、そばにいる人は「困っているのかな。ほっとけない。」という気持ちになります。そして思わずゴミを拾います。ゴミ箱ロボットはゴミを集めるために存在するので、その目的は達成されます。加えて、ロボットに手を貸した人間も嬉しさを感じます。

岡田先生はこう言います。「自分の中にあるいろんな機能を備えて、自己完結するのではなく、周りに半ば委ねつつ、支えてもらうことで物事を成し遂げることを『関係論的な行為方略(こういほうりやく)』と呼びます。この考え方から生まれたのが弱いロボットです。弱いロボットの不完結・不完全な部分は、人との関わりの中で相手の強みや優しさを引き出し、結果的に物事を成し遂げてしまうのです。」弱さから強い関係性を引き出すという思想を土台にロボット開発を進めているのです。

人に頼ること、人に頼ろうとすることは、困難を乗り越えるときに必要な大切な力です。ただし、岡田

先生は「頼る人」―「頼られる人」のように役割を固定すると、間違った関係性が生まれると指摘します。お互いが、それぞれの「弱さ」を共有し、認め合いながら、どちらも支える側・支えられる側にもなる社会づくりが大切だと語っています。

弱っていること、助けてほしいこと、困っていることは積極的に表現すべきです。たとえ、これを読んでいるあなたがいつも強い人だと思われていたとしても、発信すべきです。アニメのロボットのような固定したキャラクター設定にこだわりすぎないでほしい。人間はもっと複雑です。全能ではありません。

しかし弱い姿を表に出すには勇気が必要です。一番の問題は、誰かが振り絞ったその勇気を見下すことです。自分や他人の弱さや不完全さを否定することです。こういう考えの持ち主が構成する社会は息苦しいです。むしろ、誰かの発信を敬い、それをきっかけに支え合う力が自然に発生し周囲を巻き込むのが成熟した社会の姿です。

孟子に「惻隱(そくいん)の心」という言葉があります。これは井戸に落ちそうになった子どもを見たら、思わず手を出して助けようとする心根を指しています。助けたら、子どもの親からお礼がもらえるかも知れないとか、助けないと「非人情なやつだ」と周りから責められるかも知れないとか、そういう計算抜きで、ぱっと手が出る。そういうものです。「ちょっと、手を貸して」と言われたら、ぱっと手が出る。このように介入を求める他者からの救援信号を感知してはじめて、惻隱の心が発動するのです。

学校は社会の縮図です。今の社会ではありません。今よりも一歩先の未来を構想する社会です。なぜならば、皆さんはじめ学校で学ぶ子どもたちは一歩先の未来社会を担い、切り拓く存在だからです。人と人とのつながりを復活させることは、これからの社会を生きる重要なテーマだと思います。「ぱっと手を出したくなる」弱いロボットは、次の社会がめざす姿を教えてくれているのではないのでしょうか。

11月は教育相談週間が設定されます。皆さんには「誰かに頼る勇気」と「誰かからの呼びかけに反応する感度」を気にかけて、寒さに負けずに学校生活を送っていただきたいと切に願います。